



夢の丘プレイボール館全景
(平成6年8月15日 第42号)



来館者が楽しんでいる様子
(谷村さんから写真を提供)

平成6年に安平地区の大自然に夢の丘プレイボール館を作りました。仲間や子どもたちにも北海道の自然の素晴らしさを伝えたい思いから、大自然の中を選び、町の協力があって町有地を借りることができました。

子どもたちの交流なので、畑を作って馬や牛を離して子どもたちがその場所で自然と触れ合うことをテーマとしていました。地元の子どもたちがそこで遊び、道外の子どもたちが交流したりするのが一番。白いイス、テーブルを置いてイスに座って1日過ごすだけでも贅沢を感じられました。大人はバーベキューしたりコンサートしたりするのが日常でしたね。

世界で展覧会を開くほど有名な方からメッセージが寄せられるほど、月曜日新聞はつながりを作ってくれましたね。某番組の特集でも建物が建っていないときに、夢の丘プレイボール館の活動をやりたいという夢を語ったことがあります。その番組を視聴していた、大企業の英会話塾の社長が北海道出身で名古屋で活躍されていて、「君たち（谷村さん、日暮さん）を応援したくなった」と連絡がありました。夢の丘プレイボール館が完成したら、毎年、子どもたちを100人ぐらい派遣すると言ってくださいました。実際、10年間子どもたちが来てくれましたね。まちの人の温かさにより、助けられて夢を加速させまし

た。助けてくれたまちの人がいなければこの場所はなかったです。受け入れてくれる、助けてくれる人がいたから活躍できました。キーマンになる人がいるから外から来た人が輝ける。いきなり輝けるのではなく、外から来た人たちに手を広げる人たちがいるからこそ輝けるのだと思います。

プレイボールには、野球が始まるときの合図も指していますが、プレイには遊ぶという意味もあるので、「さあ、遊びましょう」という気持ちと子どもも大人も贅沢な時間を満喫してくださいという気持ちが入められていました。東京から友達、仲間と一緒に描いた夢が形になった瞬間でもあるので感慨深いものがありました。始まるよりもその後の方が大事なので、始まったときの気持ちを思い出せば「さあ、プレイボール」って感じですよ。

最後に、月曜日新聞とはどんなものだったかを親交が深い4人に聞いてみました。

桜木半治さん

当時、自然塾を立ち上げた3人、吉川さん、まちの人たちとのつながりがあったのが新聞だったと思います。発行者として、まちの人を紹介したいという気持ちが強かったので、取材をすることで行動範囲が広がり、今でも町内に知り合いもいるので、そういったつながりができました。やってきたことは決して無駄ではなかったです。今でも忘れられないぐらい記憶に残る月曜日新聞でした。

日暮孝男さん

私は道外から来たのに、まちの人が快く受け入れていただいたので感謝しています。交流するにあたって、まちの人と仲良くさせていたいただきだったので、そういったつながりを作ってくれたのが月曜日新聞だったと思います。

大橋博範さん

吉田牧場さん、吉川良さんといったさまざまな人とのつながりやご協力があった移住しました。道外から来た私でもまちの人の中に知り合いができ、当時の若い頃の私にとってはとてもありがたいことでした。新聞では、ご挨拶も兼ねて少しずつ知名度が向上したり、町内・町外の皆さんにも知ってもらえたので、とても良いツールでした。

谷村琢哉さん

私たちがやりたかったことが有名か無名か、お金持ちか貧乏か、それらの物差しではなく、「ただ一度の人生をいかに楽しむか」でした。有名ではなくても輝けるんだと。テレビやメディアの評価に対しての挑戦でもあり、まちでも輝けるもの、素晴らしいものがこんなところにあるんだという自分を自分たちで伝え

脱サラし、自然塾ができた、夢の丘プレイボール館ができた一つひとつ夢が形になっていくと始まったんだなという思いはありました。

たかかった、それができていました。月曜日新聞は数年やっていきましたが、その精神は今も伝えたいです。